

P-11 思春期における顎関節症の治療に
ついて

○井上浩一郎，奥 猛志，森主宜延，
小椋 正

鹿大・歯・小児歯

近年，口腔の機能異常に対する問題が，顎関節症を主体として提示され，その歯科医療管理への関心も高まりつつある。

しかし，いまだ原因も明確に分類できない現状においては，病態に対して直接的治療管理を行なうことができず，一般的に，共通する原因として認められている咬合機能異常に対する改善による効果を期待した治療が行なわれている。本学においても，通称スタビライゼーションスプリントの範疇にはいるミシガン型スプリントを使用し多くの患者の治療を行なっている。

本報告では，治療の流れに加え，治療開始後に対する状況すなわち，1)症状が解消し咬合調整を行なった症例，2)スプリントによる症状の軽減後，矯正治療を行ない，その後咬合調整を行なった症例，3)症状，主に関節雑音が残った患者に対してカウンセリングにより，残遺症状に対する対応の同意を得，経過観察を行なった症例，4)残遺症状としての関節雑音の治療をさらに希望した者に対するリポジショニングスプリントによる対応を行なった症例，5)症状改善の認められないまま来院しなくなった症例などその他；心理的な要因や他の歯科疾患からくる顎関節症状のみられる症例について，顎関節症患者の歯科治療管理における種々の状況についての詳細を説明する。